

一一ノ八、笠置寺多聞院毘沙門天王記

出典 笠置寺所蔵の原本

解説 後醍醐天皇の召しに応じて馳せ参じた楠正成が毘沙門天堂の本尊を自ら手彫りしたものとする由来を記したものである。

この像については阪大によって調査がなされており、構造・作風などに鎌倉前期の特色が顕著で、十三世紀初頭の制作と思われるとする。この像が元弘の役以前から笠置寺に伝わっていたという史料もなく、その伝来過程は不明である（小野随心院所蔵の文献・画像調査を基礎とする相関的・総合的研究とその展開一（研究代表者 荒木浩）中にある笠置寺調査報告 平成十八年三月）。

江戸時代には靈仏として解脱上人六百年忌などのおりに開帳され、庶民の信仰を集めていた。

なお原本は異体字によるところが多いがすべて表記は正体字とした。

原文

笠置寺多聞院

毘沙門天王記

山城州相楽郡鹿鷲山多聞  
密院者直笠置教寺之僧坊  
有山之巽隅焉安位毘沙門  
天王之木像冉為本尊也其  
先名曰般若台矣則解脱房  
上人栖心之別墅而春日大  
明神垂跡之靈区也仄聽上  
人在世之日方構社於茂林  
中偏敬和光同塵之神德高  
築壇於巨石上專授放生禁  
殺之戒文朝伴麋鹿而往詣  
以不避行露之灑々暮導緇  
素而教化以無厭仏事之冗  
々琪樹圍之如梅檀瑞氣繞  
之似喬雲矣而今革夫旧呼  
以多聞成院号者何之謂耶  
郷党之耆宿伝云胥膺乎中  
古元亨之澆季 後醍醐帝

為王子武將之被襲奪大宝之位与彼共戰鬪而官軍不得利敗北之天皇暫退平安城蒙塵于畿外焉臻斯時辱枉龍駕於此山而薄定皇居言保宸襟矣越扈從之公卿等拳議促六軍以追放海內之寇讎焉然其勢終有不可果敢之兆也故天皇自凝叡慮更祈獲神助焉吁羞厥雖帝運之轆軻時深信所致寔苟有休徵而大率豈唐捐哉御寢之夕偶尔得神之告曰疇昔之夜夢祈獲河苧志貴山之足異木枝獨抽秀於南方者也皆倏召博士卜筮之則円之云必至彼地岐得良弼而大利官軍焉粵徑令勅使疾赴其境果將楠氏正成來矣僉曰赴々武夫於文亦不乏彬彬々而亦不野也天皇親相見憚然有喜之色躬自就問軍事口占韜略梗槩焉想曾与周文王之狩呂望兮釣台殿高宗之得伝説兮巖辺共惟若合符節矣者也坎彼正成者則其父母懇禱于河之志貴山毘沙門所以產之男子欲不忘夫瑞而穰多門兵衛焉為兒時嬉戲常構城壘飽嗜軍礼暨乎弱冠繼孫吳之術既絶興張蕭之謀正□芳声振今威光輝古矣欽奉詔命主領官兵而出当將陳於他邦之月厚懷志願手彫刻彼天之肖像一軀冉

寄付此般若台也院主便安置之換向之本尊焉爾來易素号而名多聞院多聞即毘沙門之漢語也厥多聞天者四王天主之隨一與七万八千億諸仏而護持仏法之兵士也加旃鎮亭々獨立須弥北畔黃金埵上而下視人界賞善罰惡殊教武功發揮之尊天莫過於焉因楠氏亦縱歸崇此之天矣頭被金甲者降伏四魔軍之形相脚踏兩鬼者滅除十惡業之表示也左手擎普集功德微妙之塔者旗內具無量之知恵右手執震多摩尼衆宝之棒者旌外出莫彊之福德矣貧人依茲而無不富挾者依茲而無不屈魔民依茲而無不退業鬼依茲而無不消孫枝末葉如茁兮彼蓬蒿逐春蕃茂禍萌妖孽似悴兮此楊柳每秋枯朽於戲偉哉矣尊天之懿德夫惟孰不渴仰之信望之乎感而有応也猶声之發響者也與經曰若有人奉仕於□沙門天王得十種福一得無量福二得衆人愛敬福三得大智慧福四得長命福五得眷属福六得勝軍福七得田畠福八得蟹狼如意福九得值善知識福十得仏果大菩提福也如此之靈感不可勝計唯記其万之一而已耳備見于仏之所説毘沙門天王功德經等中焉因之竺乾之

四姓聽之而信支那之四民  
觀之而仰扶桑之四民學之  
而尚矣且戰場冥助法門顯  
益勳通力於田村麻呂者族  
滅鈴鹿山之賊夷遺神變於  
鞍馬精舍者逐掃暹法師之  
怨靈噫若是妙応亦復不違  
縷陳焉詳出乎他之縁記文  
夫思之矣耶

皆

延宝九龍集辛酉仲秋吉祥日

武陵沙門道淳叟補孝識

多聞院住持須長房園真

置焉

読み下し文

山城州相樂郡鹿鷲山多聞密院は直に笠置教寺の僧坊、山の巽(東南)隅に有り。毘沙門天王の木像を安位し、冉て本尊と為す也。其の先名を般若台と曰う(注二)。則ち解脱房上人栖心(心を休める)の別野にして春日大明神垂跡の靈区(靈域)也。

仄聽(ほのかに聴く)するに、上人在世の日、方に社を茂林中に構え、偏に和光同塵(注二)の神徳を敬まはんとし、高く壇を巨石上に築き(注三)、専ら放生(捕らえた生き物を放してやること)禁殺の戒文を授く。朝に麋鹿(いづれも鹿の類)を伴いて往きて詣じ、以つて行露(路の上の露)の灑々(露の多いさま)たるを避けず、暮れに緇素(僧と俗人)を導きて教化し、以つて仏事の冗々(忙しいさま)たるを厭うこと無し。琪樹(玉のように美しい樹)之を圍みて梅檀(香木の名)の如く、瑞氣(めでたい雲気)之を繞りて喬雲(めでたい雲)に似たり。

而して、今夫れ旧呼を革めて以つて多聞成院と号するは何の謂れなるや。郷党(村里の人々)の耆宿(学徳の優れた老人)、伝えて云う。胥膺(全てを引き受けること)たるかなと。

中古、元亨(二三二年、後醍醐天皇が親政を開始したとき)の澆季(人情の軽薄となった末の世)、後醍醐帝王子と為るや、之れ武將に大宝(天子の位)の位を襲奪さる。彼に与して共に戦闘するも官軍利を得ず。敗北の天皇、暫く平安(京都)の城(御所)を退き、畿外に蒙塵(天子が変事に難を避けて都から逃げ出すこと)す。斯の時に臻りて、辱も龍駕(天子の車)を此の山に枉げ(「枉駕」とは来訪すること)薄く皇居と定め、言に宸襟(天子のみこころ)を保んず。

越に扈從の公卿等議を挙げて六軍(天子の軍隊)を促し、以て海内(国内)の寇讎(かたき)を追放せんとす。然るに其勢、終に果敢(思い切つて物事をなすこと)を不可とするの兆有る

也。故に天皇自ら叡慮を凝し、更に祈りて神助を獲んとす。

吁羞厥れ帝運の轆軻(不遇のさま)の時なると雖も、深く信じて致す所、寔に苟くも休徴(めでたいしるし)有りて大率(おおむね)豈唐捐(むなしく損なわれる)することあらんや。御寝の夕、偶爾(たまたま)神の告げを得て曰く「疇昔(昨日)の夜、夢の祈りに河州志貴山の足に異木を獲る。枝は獨り南方に抽秀(大きく芽生える)する者也」と。皆に倏博士を召して之を卜筮(占うこと)し、則ち円(追求すること)して云うに「必ず彼地の岐に至れば良弼(よい補佐の臣)を得て、大いに官軍を利せん」と。粵に徑に勅使をして疾く其の境に赴かしめ、果将(まことの将)楠氏正成來たる。

僉曰く、赳々(たけく、勇ましいさま)たる武夫(勇士)は文に於いても亦乏ならず、彬々(文とその内容が並び備わること)として亦野(がさつ)ならず也。天皇親しく相い見て、憚然(喜びのさま)として喜びの色有り。躬自(いづれも「みずから」)軍事を就問するに韜略(兵法の書である六韜と三略)の梗槩(あらまし)を口占(口移し)をすることす。想うに曾て周文王の呂望(注四)を釣台に狩り、殷高宗の巖辺に傳説(注五)を得る、共に惟うに符節(符説)はわりふの意を合するが若き者也か。

彼の正成なる者、則ち其父母河(河内のこと)の志貴山毘沙門に懇禱(懇ろに祈る)し、所以に男子を産む。夫の瑞(めでたいこと)を忘れざらんことを欲し、多門兵衛と称するなり。児と為りし時、嬉戯として常に城堡を構え、軍礼(軍事に関する規定)を飽嗜(あきるほどむさぼること)す。暨(果断で勇ましいさま)なる乎。弱冠にして孫吳(注六)の術を継ぎ、既に絶えし張蕭の謀を興す。正に芳声を口し、今に威光を振いて古を輝かすなり。

欽で詔命(天子の命令)を奉てまつり、官兵を主領(かしらとなつて取り締まること)し、出ずるに当たり將に他邦の月に厚き懷志(抱いている志)を陳べ、願いて手ずから彼の天(毘沙門天)の肖像一軀を彫刻し、再て此般若台に寄付する(注五)也。院主便ち之を安置し、向(以前)の本尊に換う。爾來(それ以來)素の号を易て多聞院と名づく。

多聞とは即ち毘沙門の漢語也。厥れ多聞天は四王天主の隨一にして、七万八千億の諸仏を興し(動員すること)、仏法を護持せる兵士也。加うるに旃鎮(旗のおさえ)、亭々(高くそびえたつさま)として須弥の北畔、黄金の垂上(盛土の上)に獨り立ちて(注七)下に人界を視、善を賞し悪を罰す。殊に武功を發揮するを教える尊天、焉に過ぎる莫し。因つて楠氏亦縦に此の天(毘沙門天)を帰崇す。

頭に金甲を被るは四魔の軍を降伏せしめるの形相、脚に兩鬼を踏むは十惡の業(現在の災いのもとになる過去の行い)を滅除せしめるの表示也。左手に撃げ普く功德を集む微妙の塔は旗内に無量の知恵を具うもの、右手に執る震多摩尼(思うとおりに珍宝を出すといわれる珠)衆宝の棒は旌(はた)外に莫彊(きわまりなく大きい)の福德を出すものなり。

貧人茲に依りて富まざる無く、挾者茲に依りて屈せざる無し。魔民(人の心をかき乱し正道

の邪魔をする者) 茲に依りて退かざる無く、業鬼(一切の悪業) 茲に依りて消えざる無し。孫枝末葉(枝葉の端々まで) 茁くが如きなり。彼の蓬蒿(蓬とよもぎ) 春に蕃茂を逐げ、禍萌の妖孽(わざわい) 悴むに似たり。此の楊柳は毎秋 戯に枯朽す。偉なる哉。尊天の懿徳(立派な徳)、夫れ惟に孰ぞ之を渴仰し之を信望せざらんや。感ずれば而して応有る也。摶(あつまる) 声の響きを発する者也

与に経に曰く、若し人有り毘沙門天王に奉仕せば十種の福を得んと。

- 一に無量の福を得、
- 二に衆人愛敬の福を得、
- 三に大智慧の福を得、
- 四に長命の福を得、
- 五に眷属(みうち)に福を得、
- 六に勝軍の福を得、
- 七に田畠の福を得、
- 八に蝥蛄(蚕をかうこと)如意の福を得、
- 九に善知識(徳の高い僧)に値する福を得、
- 十に仏果大菩提の福を得る也。

此の如くの靈感勝計(あげて数えること)すべからず。唯だ其万の一を記すのみ。備に仏の説く所を見るに毘沙門天王功德経等に中る(符合する)。之に因り、竺乾(インド)の四姓之を聴きて信じ、支那の四民之を觀て仰ぎ、扶桑(日本)の四民之を学びて尚う。且つ戰場にて冥助し法門(仏道に入る道)にて益を顯す。田村麻呂に於いては通力を勳せ、鈴鹿山の賊夷を族滅(一族を根絶やしにすること)し(注八)、鞍馬精舎に於ては神変を遺り、暹法師の怨靈を逐掃するなり。噫、妙応是の若く、亦復縷陳(こまごまと述べる)ことに違あらず。詳出乎他の縁記文夫思之矣耶

皆

延宝九(一六八一年)龍集(年のこと。公転周期十一・八六年の木星に因む)辛酉仲秋吉祥日

武陵(江戸の異称)沙門道淳叟補孝識

多聞院住持順長房園真

置焉

注一、多聞院は元弘の役で笠置寺が焼かれてから後、貞慶の六角堂が所在した般若台に置かれていた。

現在の笠置寺毘沙門堂は笠置寺本坊(江戸時代は福寿院)のすぐ東の高台にある。般若台から

現在の地に移ったのは多聞院が火災に遭ったのを機に、寛政九年(一七九七年)風当たりの比

較的弱い現在の場所に移転したものである。

注二、 仏が衆生を救うために、その本地の知恵の光を隠して人間界に姿を変えて現れること。

注三、 貞慶が春日大明神を勧請して社を建てたこと。

注四、 太公望呂尚。渭水で文王が呂尚と会い、自分の師としたこと。

注五、 殷の武丁（高宗）の宰相と伝えられる伝説的な人物。呂尚と並んで、名臣の代表としてあげられる。刑人とともに道を補修していたところを高宗に見いだされて宰相となり殷の中興に寄与したという。

注六、 春秋時代の孫武と呉起。共に兵法家でその書に孫子と呉子がある。

注七、 多聞天は仏の住む世界を支える須弥山の北方を守護しているとされる。

注八、 田村麻呂は「毘沙門の化身、来たりて我が国を護る」（公卿補任）とされる。

田村麻呂が勅命によって鈴鹿山の賊の討伐に出たときに、千手観世音が出現しその助勢によって敵をことごとく滅ぼしたという（謡曲「田村」）。

これによれば田村麻呂が通力を得たのは毘沙門天によるのではなく、観世音菩薩である。田村麻呂は清水寺の創設に一役買っている人物でもある。清水寺本尊十一面観音の脇侍として勝軍地藏菩薩と共に勝敵毘沙門天として安置されているため、毘沙門天も田村麻呂の信仰するところとなったのであろう。

東海道土山宿には田村麻呂が鈴鹿山道の悪鬼を平定した遺徳によって坂上田村麻呂逝去の翌年（弘仁三年 八十二年）嵯峨天皇の勅願所として田村神社が創設された。